

東海道川崎宿 起立400年

～むすびつながる 東海道～

東海道
五拾三次之内
川崎



- ・「郷土あるところに観光あり」
- ・ふるさと川崎宿に想いを寄せて
- ・川崎宿の成り立ちとにぎわい
- ・江戸っ子もこぞって参詣した、川崎大師
- ・川崎宿400年 街道は未来へ続く
- ・肌と心、そして地域にもうるおいを
- ・東海道川崎宿瓦版
- ・川崎宿マップ

CONTENTS

- 「郷土あるところに観光あり」
ふるさと川崎宿に想いを寄せて
- 川崎宿の成り立ちとにぎわい
- 江戸っ子もこぞって参詣した、川崎大師
- 川崎宿 400 年 街道は未来へ続く
- 肌と心、そして地域にもうるおいを
- 東海道川崎宿瓦版
- 川崎宿マップ



明治 5、6 年撮影。一説には「六郷の渡し」を写したものとされる(放送大学附属図書館所蔵)



2023 年、六郷橋から見た川崎駅方面



広重「参宮上京道中一覽双六」(国立国会図書館所蔵)

東海道川崎宿 起立四〇〇年

くむすびつながらる 東海道く

日本橋を発ち、多摩川を渡ってから最初の宿場町が「川崎宿」である。一六二三年に成立し、東海道の旅人や川崎大師への参拝客でにぎわった。二〇二三年は川崎宿ができてから四百年。本誌では川崎宿のにぎわいの歴史と、その記憶を受け継ぐ取り組みについて紹介する。

「郷土あるところに観光あり」 ふるさと川崎宿に想いを寄せて

旧東海道川崎宿で550年続く旧家に生まれ、戦火、そしてここからの復興を見つめ、川崎宿・きた川崎市観光協会会長・斎藤文夫さん。ふるさと川崎宿への思いと今後について聞いた。

川崎市の経済発展・観光都市化に取り組んで

幼少の頃の川崎宿には、間口が三〇間(約五四m)ほどある大店も軒を連ねていましたが、ほとんどが、間口七間(約十二・六m)ほどの町家建、鰻の寝床のような細長い家屋が並んでいました。うちは洋品を扱う商家でした。川崎は、関東大震災では大きな被害を受けることなく、江戸時代末期からの建物が戦前までは数多く残っ

ていましたね。そうした姿が一変したのが、昭和二〇年四月十五日の川崎大空襲でした。中学四年生だった私は、父と母の手を握って、かつてあった清水池に逃げました。空襲が収まり、家に向かう途中町を見渡すと、陸上競技場(現川崎競輪場)に大勢の人が避難している様子が見られました。宮前小学校

と赤煉瓦の三階建ての電話局、川崎市役所だけが残っていましたね。旧東海道に面した我が家も燃えてしまいました。こうして川崎宿もかつての面影を失くしてしまつたのです。私は大学を卒業し会社勤めを始めた頃から、商人ではないけれど、川崎宿、さらには川崎という街全体の繁栄を考えるようになりまし

た。昭和三〇年代からしばらくは、工場街がにぎわい、川崎も好景氣を迎えました。しかし、現在はそうした工場が地方や海外に移転し、その場所は研究機関など知の集積地になり、産業形態が変化してきています。私は現在川崎港振興協会会長を務めています。川崎市民でも港がどこにあるか知らない人も多いのが現状です。そこで、小学校の社会科見学で川崎港を訪れてもらうようにしました。近年川崎港の輸出入量は増加しています。今後、港湾事業が川崎の経済を担っていければと思っています。

そして何よりも大事にしていきたいのが、観光です。江戸時代、川崎宿は通過町でした。江戸を出たら保土ヶ谷宿や戸塚宿まで一日で行ってしまふ。その宿命は長年引き継がれて来ました。川崎には川崎大師以外観光地はないと言われ

ていましたが、私は「郷土愛があるところには観光あり」と考えています。観光施設がなくても、自分たちの地域の歴史や文化を知れば、おのずと観光が何か見えてくる。川崎市制七〇周年、八〇周年の際には、寄付を募り、川崎ゆかりの歴史上の人物にふんする「歴史絵巻パレード」を行いました。私はそうしたまちおこしの企画は、行政ではなく、市民である私たちから自然と生まれるべきだと思っています。今年、川崎宿起立四百年、そして来年は市制百周年を迎えますが、ぜひ、次の世代のリーダーが現れることを願っています。

た。昭和三〇年代からしばらくは、工場街がにぎわい、川崎も好景氣を迎えました。しかし、現在はそうした工場が地方や海外に移転し、その場所は研究機関など知の集積地になり、産業形態が変化してきています。私は現在川崎港振興協会会長を務めています。川崎市民でも港がどこにあるか知らない人も多いのが現状です。そこで、小学校の社会科見学で川崎港を訪れてもらうようにしました。近年川崎港の輸出入量は増加しています。今後、港湾事業が川崎の経済を担っていければと思っています。



川崎市観光協会会長 斎藤文夫さん

1928年生まれ。慶應義塾大学卒。大日本製糖株式会社勤務。外務大臣藤山愛一郎氏の秘書を経て、63年から県議会議員を5期(74代県議会議長)、86年から参議院議員を2期務める。神奈川県観光協会会長、川崎港振興協会会長、県更生保護協合理事長などを歴任。勲二等瑞宝章、国際浮世絵学会賞、神奈川文化賞、川崎市文化賞などを受賞

みどころ

川崎浮世絵ギャラリー〜斎藤文夫コレクション〜

日本を代表する浮世絵コレクターでもある斎藤さん。神奈川県ゆかりの作品を中心に、現在は5,500枚をコレクションしている。2001年に「川崎・砂子の里資料館」を開設し、一般に公開。現在は、そのコレクションを「川崎浮世絵ギャラリー」に無償貸与し、展示している。



川崎市川崎区駅前本町 12-1 川崎駅前タワー・リパーク 3F TEL 044-280-9511



広重「東海道五拾三所名所 川崎宿河原真景」(国立国会図書館所蔵)



川崎信用金庫本店(川崎市川崎区砂子2-11-1)の脇を通る東海道。稲毛神社の方からこの地を見ると若干の高低差がある

業務です。そのために、各宿場に入足や馬を常備させました。また、参勤交代制が始まると、大名行列などの往来も一層激しくなり、そうした人たちの宿泊所や休憩場所としての機能を整える必要も出てきました。

川崎宿は、元和九年(一六三三)

に起立されました。宿駅伝馬制が交付されてから二〇年後のことであり、これは東海道の宿場の中でも、最後の方と言えます。それは、川崎宿起立の理由から説明することができません。川崎宿が起立する以前は、江戸を出発した荷物を最初に品川宿で受け渡し、その後多摩川を渡って、神奈川宿で受け渡しがされていました。その距離は五里(約二〇km)に及びました。そうすると、品川、神奈川の宿場の負担が大きく疲弊してしまいます。そこで、その間にある川崎に宿場がつけられたのです。ただ、元和九年以前にも宿場のような機能を果たしてい

川崎宿の成り立ちとにぎわい

江戸時代後期には七二軒の旅籠が並び、神奈川県下九宿のうち、三番目の規模となった川崎宿。ここからは神奈川県立歴史博物館館長の望月一樹さんに、川崎宿の歴史や当時のにぎわいをひもといていただきます。



神奈川県立歴史博物館 館長 望月一樹さん

1961年、神奈川県生まれ。1988年より川崎市市民ミュージアムの学芸員となり、学芸室長を経て、2018年に神奈川県立歴史博物館の学芸部長に就任。2021年より現職。専門は日本近世史であるが、学生時代に学んだ日本古代史についても研究している。

東海道の宿場の中でも後発だった川崎宿

古代・中世を通じて東西交通の重要な幹線道路だった東海道。徳川家康は、天正十八年(一五九〇)江戸に入国し、五街道の整備に取り掛かりました。慶長六年(一六〇一)には伝馬

朱印状と「御伝馬之定」を交付し、東海道の宿駅伝馬制度が敷かれることになりました。使者や荷物の往来で利用されていた東海道は約四九二kmあり、その途中に宿場(宿駅)が定められました。宿場のもっとも重要な役割は、幕府など公用の役人や荷物を次の宿場まで送り届ける継立

たことが窺える史料が残っていますので、正式な起立以前から臨時的に宿場の役割を担っていたのだと思います。

自然の高低差を利用してつくられた街道

東海道や川崎宿を整備するにあたり、どのような土木工事がなされたのかは、詳しい史料が残っていないので正確にはわか



新宿(しんしゅく)、砂子(いさご)、久根崎(くねざき)、小土呂(こところ)の4つの町で構成された川崎宿。写真は現・本町1丁目

みどころ

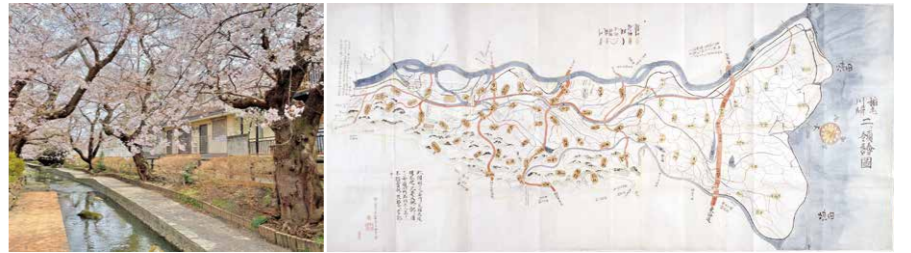


稲毛神社

川崎宿、河崎七ヶ村の鎮守として広く崇敬を集めた。境内には小土呂橋遺構が移設されている。小土呂橋は、東海道が新川堀(現・新川通り)を横切る場所にあり、慶安3年(1650)に架橋されて以降、昭和7年(1932)に新川堀とともに埋められるまで約200年間利用されていた。



川崎市川崎区宮本町7-7
TEL 044-222-4554



右/明治初期の二ヶ領用水絵図(川崎市市民ミュージアム所蔵) 左/現在は、都市の生活環境用水として利用されている二ヶ領用水。幹線の堀だけが取水口から幸区・鹿島田の辺りまで残っている。地元の人々が桜や桃を植えるなど、地域の共有財産となっている

れた砂等が流路沿い、またはその周辺に堆積してできた高まり)を利用して造られたのだと想像できます。都市化が進み今ではほとんどわからなくなりましたが、実際に歩いてみると稲毛神社から川崎信用金庫の方を見れば若干土地が高くなっていることがわかります。そして、ここから川崎駅の方が逆に少し低くなっている。そのことから、東海道は自然堤防という微高地、自然的な地形を利用して整備されたのではないのでしょうか。

新田開発の礎を築いた 小泉次大夫

徳川家康は関東に入国すると、石高を増やそうと新田開発のための河川改修や農業用水路の開削を積極的に行います。水利土木技術を代々受け継ぐ家に生まれた小泉次大夫は家康の家臣として江戸に入り、その後稲毛・川崎領の代官に任命されました。当時、多摩川の度重なる大洪水で川崎一帯は疲弊していました。

小泉は慶長二年(一五九七)に世田谷・六郷領(東京世田谷区・大田区)の六郷用水、稲毛・川崎領(川崎市)の二ヶ領用水の開削に着手し、十四年の歳月をかけ、農業用水を完成させました。ただ、二ヶ領用水の完成によって、新田開発が進んだとは言い難いと思います。慶長十八年(一六一三)の川崎のある村の検地帳が残っていますが、それを調べると、二ヶ領用水の整備によってわずか二%しか土地は広がっていません。よって、開

発当初は、大規模な新田開発というよりは、今ある田んぼに安定して水を供給することで米の収穫を確保することが目的だったのではないかと思います。江戸時代後期になると、二ヶ領用水により六ヶ村、二千haの田んぼが潤ったと言われています。灌漑用水でもあり生活用水でもあった二ヶ領用水は「命の水」と呼ばれています。そして、それを生んだ小泉次大夫は、田中休愚とともに川崎の恩人として名を残しています。

六郷の渡船で財政を安定させた田中休愚

江戸時代、人足や馬の負担は宿場にとって非常に大きく、どこかの宿場も財政は厳しいものでした。川崎宿も起立した元和九年(一六二二)から人足や馬を常備し、継立業務を行いました。起立直後から、負担が重くやっていけないと、宿では幕府に助成を願い出ています。そこで幕府は、川崎宿が渡し場のある要衝地であることから、助成米や助成金を支給し、存続を図りました。一方当初は本陣もなく、代わりに寺を利用していたのですが、その後寛永五年(一六二八)頃に本陣が整備され、宿場としての機能が果たされるようになります。

の田中原左衛門家に出入りした縁から、同族の川崎宿本陣職・田中兵庫の養子に迎えられました。厳しい財政難に陥っていた川崎宿の財政を立て直すために休愚が目をつけたのが、六郷の渡し

の田中原左衛門家に出入りした縁から、同族の川崎宿本陣職・田中兵庫の養子に迎えられました。厳しい財政難に陥っていた川崎宿の財政を立て直すために休愚が目をつけたのが、六郷の渡しの渡船賃でした。多摩川には慶長五年(一六〇〇)に橋が架けられましたが、大雨によって幾度となく流出していました。貞享五年(元禄元年・一六八八)にも流出し、それ以後は渡船が使われるようになります。当初は江戸の町民が幕府から請け負って渡船業務を行っていましたが、その後多摩

江戸時代、人足や馬の負担は宿場にとって非常に大きく、どこかの宿場も財政は厳しいものでした。川崎宿も起立した元和九年(一六二二)から人足や馬を常備し、継立業務を行いました。起立直後から、負担が重くやっていけないと、宿では幕府に助成を願い出ています。そこで幕府は、川崎宿が渡し場のある要衝地であることから、助成米や助成金を支給し、存続を図りました。一方当初は本陣もなく、代わりに寺を利用していたのですが、その後寛永五年(一六二八)頃に本陣が整備され、宿場としての機能が果たされるようになります。しかし、それでも財政が厳しいという状況の中で現れたのが田中休愚でした。多摩郡平沢村(東京都あきる野市)の農家に生まれた休愚は絹仲買の商いを兼業し、多摩川沿いを行商したといわれます。そこで川崎宿を訪れた際に、小向村(川崎市幸区)



広重が描いた六郷の渡しの風景(「東海道五拾三次之内川崎 六郷渡舟」(【公社】川崎・砂子の里資料館所蔵)と現在の多摩川の風景。現在は六郷橋が架かり欄干にモニュメントが掲げられている



みどころ

上の本陣(佐藤本陣)



のちに、詩人・佐藤惣之助の生家として有名になった佐藤家が宝暦年間から幕末まで本陣職を務めていたと考えられている。

中の本陣



佐藤・田中本陣の間に位置することから「中の本陣」と呼ばれていた。人足や馬などの差配を行う問屋場に向かい合う形で建っていた。

下の本陣(田中本陣)



田中休愚が主人の田中本陣は、大名や公家、旗本が宿泊する施設で、231坪を擁する堂々たる建物であった。



広重「東海道大師河原」(国立国会図書館所蔵)

賃の収入は八七八両、そのうちの五七二両を川崎宿に納めています。残り三〇〇両は、人件費や船の修理代となり、ほとんど利益が出ていないようです。ただ、これは表向きの記録なので、もしかしたら今でいう裏帳簿があったのかもしれない(笑)。通常渡船が厳しい時に、お客さんから高額のチップをもらって渡すなど副収入を得ていたと推測できます。いずれにしても、この事前入札制度は、幕末まで続きました。その点からみても、田中休愚の功績は大きいと思います。

川崎宿ににぎわいと呼んだ川崎大師の参詣者

元和九年(一六二三)に起立した川崎宿ですが、ほぼ旅人が通過するだけの宿場でした。朝、江戸を発つてそろそろ小腹がすいたかなというぐらい。大名行列は経費が掛かるので少しでも早く進みたい。逆に江戸に参勤する際も、江戸を目の前にしてわざわざ川崎で泊まる必要もない

みどころ

松尾芭蕉と弟子の別れ

八丁噺(なわて) 駅の前に芭蕉の句碑が建っている。元禄7年(1694)、伊賀に向けて旅立つ芭蕉との別れを惜しみ、門人たちは多摩川を渡り、川崎宿まで見送りにきて最後の別れを交わしたという。その時に芭蕉が詠んだ句が「麦の穂を たよりにつかむ別れかな」と言われている。



ことをきっかけに、厄除け大師としてにぎわうようになりました。江戸の人々は物見遊山という形で、休日に近隣の名所に出かけていました。その延長線上に川崎大師もあつたのでしょうか。ちよつと懐が豊かであれば、「川崎宿で一泊して宴会でも」となった。よって、川崎宿は、旅人というより江戸庶民の遊興の場としてにぎわっていたのだと思います。

口の羽田の渡しで多摩川を渡って川崎大師に行く人が増えてしまひ、六郷の渡しを利用する客が少なくなるという問題が起こつたようです。羽田の渡しは幕府から認められた正式な渡し場ではなかつたので、川崎宿から取り締まりを要請する願書が出されていますが、なかなか改善はされなかつたようです。このように、川崎宿のにぎわいは、川崎大師の参詣客のにぎわいに大きく左右されていたようです。

江戸の人々の生活を支えた人と物資の結節点

田中休愚が六郷の渡しを活用して川崎宿の財政を安定させたことから、川崎宿が六郷の渡しと一体化した宿場であつたのは間違いないと思います。広重の浮世絵にしても、川崎というと六郷の渡しを描かれています。それだけ、江戸の人々にとつても風光明媚な場所だったのでしよう。川崎大師への物見遊山を楽しむ江戸庶民の旅の拠点で

あつた川崎宿ですが、横の移動とともに、縦の移動も見てみると、川崎を拠点とした物資の移動も見えてきます。先に述べた田中休愚が絹問屋として多摩郡平沢から川崎宿に来たように、八王子の方から川崎に物資が運ばれて、ここからまた江戸や京都に運ばれていく、交通の結節点でもありました。人の移動だけでなく、物流の面でも、川崎宿は江戸時代の人々の生活を支えた重要な拠点として機能していたのだと思います。

みどころ



「江戸名所図会」(国立国会図書館所蔵)

川崎宿名物

上記は「江戸名所図会」に描かれた万年屋。奈良茶飯が評判になり、一膳飯屋から宿場一の旅籠となった。『東海道中膝栗毛』でも弥次さん喜多さんが万年屋に立ち寄り奈良茶飯を味わっている。現在、川崎宿では奈良茶飯を再現する取り組みを行っている(P18)。その他にも旅籠・新田屋のハゼ料理も人気だったよう。「多摩川下流で釣ったハゼを天ぷらにしたのではないですか」と望月さん。



広重「名所江戸百景」はねたのわたし弁天の社(公社)川崎・砂子の里資料館所蔵





左／江戸時代の開帳のにぎわいを描いた国貞「大師河原開帳図」。弘法大師像が海から揚がった由緒から、この一帯は「大師河原」と呼ばれていた
右／堂々たる大山門。真言宗の名刹・東寺(京都)の国宝・四天王像を模した四天王が門の四方に安置されている



初詣客でにぎわう川崎大師。「厄除けのお大師さま」として知られている

江戸っ子もこぞって参詣した、川崎大師

多くの旅人が参詣に訪れ、川崎宿のにぎわいにも寄与した川崎大師。開創から約九〇〇年が経った現在も変わらずに親しまれる川崎大師の歴史をひもといてみよう。

朝廷にも伝わった 厄除大師の縁起

京急川崎駅から大師線に揺られて五分。川崎大師駅南口を出ると、そこはもう川崎大師へと続く表参道だ。道々の店を眺めながら歩くこと十分、表参道から仲見世通りへ入ると、重厚な佇まいの大山門が見えてくる。

「川崎大師」として親しまれるこちらの寺院は、正式名称を「金剛山金乗院平間寺」という。平安時代後期、源氏の家臣であり無実の罪で故郷・尾張を追われた平間兼乗は東国へと逃れ、川崎



上／川崎大師駅前から続く表参道 右／大山門につるされた巨大な提灯には「魚がし」の文字が。築地市場の川崎大師魚河岸講から昭和52年に奉納された

の浜で漁師として生計を立てていた。弘法大師への信心あついで兼乗が四二歳の厄年を迎えた年、夢のお告げに導かれて海で弘法大師の木像を引き揚げた。小さな祠を建てて像を祀り、朝に夕に供養を捧げる兼乗の元を一人の旅の僧が偶然にも訪れた。高野山を出て諸国を巡っていた高僧・尊賢上人である。尊賢上人は兼乗のこれまでのいきさつを知り、二人で木像を本尊として寺院を建てることに。これが川崎大師の始まりだという。その後、兼乗は疑いを晴らすことができ、帰郷。尊賢上人は第一世山

主としてこの地にとどまり、兼乗の名前から寺名を「平間寺」と名付けた。大治三年(一一二八)のことである。

厄除大師としての御利益は、開創からほどなくして朝廷の知るところとなる。それは尊賢上人の姪が、上皇后である美福門院(藤原得子)の乳母をしていた縁からであった。美福門院は夫である鳥羽上皇に厄除大師のことを伝え、皇子の誕生を祈願したところ、たちどころに成就した。その感謝を込めて、自身の化粧の紅で川崎大師の由来をしたためた「紅縁起」(のちに焼失)を奉納したのだという。

將軍の参詣で一躍有名に 庶民に人気のバカンス

元和九年(一六二三)に川崎宿が誕生し整備されていくと、近隣から川崎大師への参詣者も増加。東海道から川崎大師へといたる道は「大師道」と呼ばれており、かつては奈良茶飯で知られる茶屋「万年屋」の脇にその道標

が建っていたという。寛文三年(一六六三)の造立で、「是より厄除け弘法大師への道」と銘が刻まれている(現在は境内に移設)。そして、文化十年(一八一三)、時の將軍・家齊が厄除け祈願に訪れたことで「厄除大師」として広く知られるようになる。物見遊山も兼ねた川崎大師への参詣は、江戸の庶民にとって人気のバカンスであった。というのも、江戸時代、庶民の移動は厳しく禁じられていたが、その例外が伊勢まいりをはじめとする信仰の旅であったからである。この当時の川崎のにぎわいは、江戸の風俗を伝える『江戸名所図会』や、歌川広重をはじめとする時の絵師らによって描き残されている。

ただ、こうした伽藍は火事や

震災で失われることに。昭和二年(一九四五)四月十五日の川崎大空襲では、ただ一つ、福德稲荷堂を残して全焼することになった。現在の大本堂は昭和三九年に、大山門は開創八五〇年を迎えた昭和五二年に完成したものである。

現在も一日も絶やすことなく厄除祈願をはじめとした護摩祈祷が行われている川崎大師。正月の三が日で三百万人以上の初詣客が訪れるのも、長く人々に親しまれてきた証だろう。今年には弘法大師誕生二二五〇年、そして来年は明治十七年(一八八四)以来十年に一度大開帳が行われる年でもある。かつての川崎宿のにぎわいに思いを馳せながら、参詣してみたいかがだろう。



上／戦火を唯一免れた福德稲荷堂
左下／境内に移された道標
右下／10年に一度、大開帳が行われる一か月間だけ授与される赤札

川崎市川崎区大師町 4-48
TEL 044-266-3420



東海道 かわさき宿 交流館

右／六郷の渡し、本陣、旅籠など川崎宿を精巧に再現した模型 上／東海道沿いに面し、街道の風情を感じられる外観 下／奈良茶飯で知られる「万年屋」を模して作ったお休み処

川崎宿を知るならまずこちらへ

川崎宿の歴史を伝える活動に取り組む地域の声を受け、2013年に誕生した。1階は川崎宿の茶屋「万年屋」を再現。奥は休憩・交流スペースとなっている。2階は宿場の模型や映像で川崎宿を解説、3階は江戸時代から近現代までの川崎の歴史やゆかりの人物について紹介している。4階は多目的空間で、市民活動や交流館主催の伝統芸能鑑賞会や寄席、講演会などに使用する。

館長の青木茂夫さんは「先日、『東海道を京都まで歩きます』という若者が立ち寄ってくれました。『京都に着いたら教えてね』と励ましたら、後日、報告に来てくれたんですよ。人、物、情報が行き交った街道の歴史を受け継ぎ、こうした出合いの場になっていることは交流館の本領発揮です」と話す。

東海道かわさき宿交流館 川崎市川崎区本町1-8-4 TEL 044-280-7321

中間灯を設置し、宿場らしいまちなみを整備する予定(イメージ)



宿場町の風情を伝える

空襲により、古くからのまちなみが焼失した川崎。宿場の歴史を伝える建物は残っていないが、その風情を感じられるまちなみの整備に行政と民間が一体となって取り組んでいる。商店のシャッターやマンホール、トランスボックス(配電機器)には浮世絵が描かれ、街路灯には「東海道川崎宿」のバナーフラッグ。今年秋には、街路灯の柱の中間に「東海道川崎宿」「東海道」と記し、浮世絵をデザインした行灯のような「中間灯」を設置予定だ。

長年、商店街で江戸風情を感じられるまちなみ整備に尽力してきた「川崎砂子会協同組合」理事長の武藤聡宏さんは、「詩人・佐藤惣之助の歌碑、川崎信用金庫本店角と小土呂橋交差点の『川崎宿』の看板、浮世絵入りの地図看板などを造り、街並みを整備してきました」と話す。

まちなみ 整備

上／川崎信用金庫の浮世絵シャッター 左下／中間灯(模型の仮設置) 右下／「川崎砂子会協同組合」で毎年年末年始に取り組んでいるイルミネーション企画。竹に穴を開けて顔をかたどった竹細工「竹小僧」で、和の雰囲気を出す



川崎宿400年 街道は未来へ続く

川崎宿周辺の振興を図るため、地域が一体となって2021年に結成された組織が「川崎宿起立400年プロジェクト推進会議」だ。ここからは歴史を受け継ぎ、未来へたすきを渡す様々なまちおこしの取り組みを見て行こう。

400年を盛り上げる取り組み

「川崎宿起立400年プロジェクト推進会議」は町内会、商店、企業、社寺、市民団体など127団体(2023年7月時点)が参加し、行政と連携を図りながら活動を進めている。会長を務めるのは「川崎駅広域商店街連合会会長」「小川町町内会会長」で、中華料理店「成喜」を営む鬼塚保さん。70年以上在住し、川崎のまちづくりに長く携わってきた。「まちなみ検討、広報、宿場まつり、スタンプラリー、六郷の渡しまつりなど、プロジェクトごとにチームを作って事業を進めてきました。川崎は空襲で焼け野原になった後、戦後復興して発展し、バイタリティーのある元気な人が多いまちです。宿場起立400年の取り組みは、東海道沿いの『線』だけでなく『面』に広げて、川崎市全体を盛り上げていきたいですね」



川崎宿起立400年 プロジェクト 推進会議

2023年4月22日「東海道川崎宿まつり」を開催。「三角おむすびレシピコンテスト」の受賞式にて。前列左から2人目が鬼塚さん

20年以上にわたる活動

推進会議に参加する諸団体の中で、市民が主体となって歴史を伝える活動を行ってきたのが「東海道川崎宿2023」だ。代表の原宇八郎さんは2001年に行われた「川崎ゆかりの歴史時代行列」を見て感激し、2023年が川崎宿起立400年になることを知ったという。「東海道川崎宿2023」の活動に打ち込む他、「かわさき歴史ガイド協会」や全国の東海道宿駅との交流を図る「NPO歴史の道 東海道宿駅会議」等にも参加している。「東海道宿駅会議が各地の持ち回りで開催している『東海道シンポジウム』は、今年10月、川崎で開催することになりました(詳細はP20)。今年は20年以上にわたる活動の集大成。シンポジウムの副題「むすび つながる 東海道」のとおり、全国の宿場とつながると共に、地元川崎で横のつながりもできました。私たちが何気なく歩いているこの道が、由緒ある道であるということを後世に伝えていきたいと思ひます」

東海道川崎宿 2023

上／川崎宿や川崎大師のガイドの他、東海道かわさき宿交流館の館内ガイドを務めるなど多方面で活躍する「NPO法人かわさき歴史ガイド協会」下／川崎宿の歴史や文化を学ぶ公開講座「川崎宿大学」。2023年2月11日は「伊能図で見る川崎宿」をテーマとし、伊能忠敬測量隊が川崎宿に滞在や通過した記録も紹介された



歴史好きの原宇八郎さん。退職後、念願だった五街道の踏破を達成した

おむすびが結ぶ人の輪

2015年より毎年開催している「東海道川崎宿三角おむすびレシピコンテスト」は、川崎に伝わる「御紋むすび伝説」を由来としている。時は江戸中期。将軍に就任するため、徳川吉宗一行が紀州から江戸に向かう際、川崎宿に滞在した。供の者は大人数で、宿場は食事の手配で混乱。そこで田中本陣の主・田中休愚は「白米一升を炊いて持参した者には三升分の値で買い上げる」とお触れを出したところ、多くのごはんが集まり、行列の人々の空腹を満たすことができた。吉宗はこの当意即妙に感心し、その後代々、紀州藩主が川崎宿を通るときには、おむすびを出させるようになったという。その際、三角形に握って丸い盆に3つ並べて「葵の御紋」に見立てたことで「御紋むすび」と呼ばれ、以後川崎宿の名物となった。このことから、川崎宿が三角おむすび発祥の地と言われている。

「東海道川崎宿 2023」委員で「NPO 法人 歴史の道 東海

道宿駅会議」理事でもある池田ハルミさんはこれを地域の活性化に活用できないかと考え、「東海道川崎宿 2023 まつり」でのレシピコンテストを提案し、開催の実現に至った。「三代前から川崎に暮らしていますが、20年ほど前は、家の前の道が東海道だということを知りませんでした。そのことに自分自身がショックを受け、それからまちおこしの活動を始めました」と振り返る。伝説をPRするために仲間とともに「川崎おむすび音頭」を製作、「おむすび-ZU」を結成した。池田さんは日々、様々なイベントに出向き、PRを続けている。

レシピコンテストの審査員の一人、市内の和菓子店「飯田屋」の飯田学さんは「毎回100を超える応募があります。私が審査するポイントはレシピの実現性。味はもちろん、傷みややすさやコストなどの観点も審査します。優勝・準優勝のレシピを使って、当店でもそのおむすびを期間限定で販売しています。意外な組み合わせの具材でも、作ってみるとおいしいから面白いですよ」と話す。



1952年創業「飯田屋」二代目の飯田学さん。和菓子のほか、おむすびや団子も人気



おむすびの被り物と半纏姿で「川崎おむすび音頭」を踊る「おむすび-ZU」。「4つの基本動作の繰り返しで、簡単です。手の動きだけでご参加いただけます」と池田さん



2023年4月22日に行われた「東海道川崎宿場まつり」での受賞式。右が優勝レシピを考案した佐藤みくさん、左が実行委員長の木村教義さん



2023年、第9回レシピコンテストのおむすび「塩さば柚子胡椒マヨむすび」(優勝・左)と「ベーコン・ひじき・のらぼう菜のお祝いむすび」(準優勝・右) ※写真の準優勝作品のおむすびは、のらぼう菜の代用として小松菜を使用

右/市内の「人形劇団ひとみ座」が川崎宿起立400年のお祝いと五穀豊穡への願いを込めて乙女文楽(女性による一人遣い人形芝居)「二人三番叟(さんばそう)」を披露 下/記念式典での鏡割り



東海道川崎宿場まつり

400年のキックオフイベント

2023年4月22日、川崎宿の総鎮守・稲毛神社と隣接する稲毛公園にて「東海道川崎宿場まつり」が開催された。このまつりは前年まで「東海道かわさき宿 2023 まつり」と称していたが、今年は川崎宿起立400年のキックオフイベントとして位置付け、2023年以降も継続するという思いを込めて、規模を拡大。川崎駅広域商店街連合会理事の木村教義さんに話を聞いた。「乙女文楽、ステージ企画、三角おむすびレシピコンテスト、ミニ歴史ガイドツアー、工作や昔の遊びなどの体験イベント、飲食の販売などにぎわいました。今後も地域の魅力を発掘し、四季折々で東海道をイメージする催しを行いたい。例えば江戸時代の用水路を復元したり、三角おむすびや奈良茶飯を常時いただける店を増やしたりなど、構想はたくさんあります」

「六郷の渡しは川崎宿を象徴するスポット。水辺を活かさない手はないと思いました」と小林さん。今後も多摩川の川辺の活用が期待される(写真は2022年11月の「六郷渡場フェス」)



多摩川の川風に誘われて

かつて江戸から旅する人が、西国への旅の始まりを実感した「六郷の渡し」。その歴史を体感する催し「六郷渡場フェス」が2022年3月と11月に開催された。当日は六郷橋から多摩川スカイブリッジまでのクルーズ船が運航(予約制)されたほか、キッチンカーでの飲食やステージでの音楽演奏を楽しむ一日に。中心となって取り組みを進めてきた「川崎銀座商業協同組合」理事長の小林一三さんは「前は140人の乗船募集に対し2000人の応募があり、反響の大きさに驚きました。2023年10月22日にも『六郷の渡しまつり』として開催する予定です。浮世絵の景色と同じく、天気が良いと富士山が見えることもあるんですよ。ゆくゆくは羽田の飛行機や工場夜景などを見られるようにしたいと考えています」と話す。

六郷の渡しまつり

2022年11月19日に開催された「六郷渡場フェス」のクルーズ船。多摩川スカイブリッジをくぐり抜けると、河口の広さを体感できる



三角おむすび発祥の地



奈良茶飯風 おこわ

上/おこわの塩味と旨味、栗の甘味が絶妙な「奈良茶飯風おこわ」(756円)。朝、日本橋を出発して東海道を歩けば、川崎あたりでちょうどランチタイムを迎える。下/岩瀬さん。和菓子の人気は創業の頃からの名物「栗最中」や、餡を包んで平たく伸ばした「かわっぴらもち」



川崎宿の名物を現代風にアレンジ

江戸時代の川崎宿の名物・奈良茶飯を現代風にアレンジして提供している店がある。大正2年(1913)創業の和菓子店「東照」。10年前、近隣の東海道かわさき宿交流館ができる時、街道の名物になるものを作りたいという思いから「奈良茶飯風おこわ」を考案した。炒った大豆・小豆・粟をお茶と一緒に炊き、しじみ汁と奈良漬を添える、という点は江戸時代のレシピと変わらない。ただ、当時は搗栗(干した栗)を使っていたが、今は仕入れの品質が安定しないため、栗の甘露煮に変更。「味つけは現代風にアレンジしました。東海道の宿場にはそれぞれ名物の食べ物があります。当店も地元で根付いた名物を作ることができて嬉しいです。テイクアウトもできますし、イートインスペースもありますので、ぜひお立ち寄りください」と店主の岩瀬巨克さんにはっこり。

東照 川崎市川崎区本町 1-8-9 TEL 044-244-5221



上層階の「コンセプトフロア」。畳敷きにベッドを配した和の趣を感じられる空間。客室名には「ISA GO」など、川崎宿を構成した村の名前が付けられている

宿場の旅情を今に伝える

川崎市本庁舎の北側に、街道の風情を醸す入口が特徴的な建物が建っている。木枠のガラス戸や格子戸、藍色ののれん、植木の松。2020年にオープンした「ホテル縁道」だ。総支配人の吉岡明治さんは「ここは東海道から川崎宿の総鎮守である稲毛神社に向かう参道にあたる場所です。かつて旅人と参詣者が行き交ったこの場所で、現代の旅行者と地域の日常が交差する、様々な『縁』が生まれる宿を目指したい」と話す。

1階には食堂があり、食事やカフェのみでの利用もできる。朝食には「三角おむすび」を提供。地元産の野菜を販売したり、マルシェを開催したりと、地域の人の交流の場にもなっている。「川崎は江戸時代より旅人を、近現代には国内外から働く人や住む人を受け入れた、多様性や寛容性のあるまち。川崎大師もあれば、夜の飲み屋街も元気。そうした多様な魅力を川崎に泊まって楽しんでいただければ」と吉岡さん。



ホテル縁道



上/吉岡明治さん。古道具の帳場筆筒を組み合わせたフロントが、街道の風情を醸す。下/ホテル入口の上部には、瓦屋根に見立てて瓦のタイルをはめ込んでいる

ホテル縁道 川崎市川崎区宮本町 2-25 TEL 044-589-5858

「ひねもすかわさき」WEBサイト



ひねもす かわさき

「ひねもすかわさき」のポスター。歌川広重の浮世絵「東海道五拾三次之内川崎 六郷渡舟」の構図を基に、現在の川崎をイメージしたイラストに仕立てている



川崎宿を楽しむ1日

「川崎宿起立400年プロジェクト推進会議」の広報プロジェクトは「ひねもすかわさき」と称する広報活動を展開している。「ひねもす」とは日本に古くから伝わる言葉で、「終日」という意味。朝から晩まで1日中楽しめる川崎の魅力を、WEBサイト、動画などを通じて発信している。

現在、WEBサイトでは1日観光のモデルプランを掲載。東海道かわさき宿交流館や稲毛神社などの歴史に触れる体験だけでなく、老舗イタリアンでのランチ、切りガラス製作体験、夜は川崎の街を一望できるバーでお酒を楽しむなど、川崎宿周辺の「今」を楽しむ1日を提案している。プロジェクトリーダーの芹澤松一さんは「若い世代や、川崎市の広域、そして東京や横浜などの鉄道沿線からも人を呼び込みたい」と意気込む。



東海道ビール & 切りガラス



左/「東海道 BEER 川崎宿工場」。発酵タンクを眺めながら、常時6~7種類のビールを楽しむ。内装の設計も岩瀬さん自身が手掛け「日本空間デザイン賞」に入選 右/岩瀬さん。「東海道 GLASS」の建物も、築70年になる元酒問屋を改装。2023年9月からは陶芸教室も始める予定

日本の伝統文化に触れる

明治時代創業の「岩田屋」は輸入のガラス商から始まり、昭和時代には国産ガラスの取り扱いを始めた。4代目の岩澤克政さんは「一級建築士の資格を取得し、私の代からはリノベーションを中心に手掛ける設計・施工業を始めました。10年ほど前、ガラス倉庫として使っていた建物をまちづくりを活かせないかと考え、かつて宿場の周りには麦畑があったと言われており、松尾芭蕉もこの地で弟子たちと『麦の別れ』(P09)をしていることから、麦酒(ビール)工場とイートインスペースを思いつきました」と話す。行政や地域の人々の後押しもあり、開業が実現。照明器具にはかつて家業としていたガラスを思いついたという。「ガラス工芸の先生に、切子で照明器具の笠を作っていただきました。2020年から東海道沿いにガラス工芸教室「東海道 GLASS」を作り、講習や体験教室を開催しています」。

東海道 BEER 川崎宿工場 川崎市川崎区本町 1-4-1 本町コーポ 1F TEL 044-272-3639
東海道 GLASS 川崎市川崎区砂子 1-4-9 砂子岩田屋ビル 2F TEL 080-9391-9140

東海道

川崎宿瓦版



催しの最新情報はこちら

東海道川崎宿起立四百年 記念事業・関連イベント

川崎宿が成立して四〇〇年となる二〇二三年、様々な記念の催しが開催されているが、最も盛り上がるのが十月だ。

十月七日(土)は川崎宿の歴史を学びながら街道を

めぐる「東海道川崎宿スタンプラリー」。二一日(土)は「東海道シンポジウム2023川崎宿」が「カルッツかわさき」(川崎市スポーツ・文化総合センター)大ホールで開催される。こちらの

予告 第35回東海道シンポジウム
東海道シンポジウム
2023川崎宿
～むすび つながる 東海道～
2023(令和5)年10月21日(土)開催!
カルッツかわさきホール

むすび つながる 東海道
基礎調査、まちづくりをテーマとした学際型カンファレンスの他、川崎宿資料の紹介がある「三角おむすび」企画。各宿場の展示、交流会など参加型の企画など検討・準備中です。地元から、全国から、たくさんのご参加をお待ちしております。

翌日も川崎宿を満喫!
シンポジウム翌日(22日・日曜)もご東場の魅力が川崎宿を満喫できるようガイドツアー、商店街・多摩川イベントなど川崎宿、東海道の魅力もより多くの方に体験いただけるよう、おもてなしいたします。

川崎宿起立400年記念
1623(元和9)年に設立された川崎宿は、2023年で400歳を迎えます。地元一帯で戦い、活性化の機会としようとして「川崎宿起立400年プロジェクト推進協議会」が様々なプロジェクトに取り組んでいます。

東海道川崎宿
起立400年
TOKAIDO KAWASAKI SHUKU 400th

公募により決まった「東海道川崎宿起立400年」を記念したロゴマーク。宿場、街道、渡船、松、富士山、三度笠などがモチーフになっている。

肌と心、 そして地域にもうるおいを

川崎生まれの
「黄色いクリーム」

藤沢の農家の四男に生まれた初代・野渡良清は、横浜の薬局の丁稚奉公を経て独立。終戦間もなく、焼け野原になった川崎の街で薬局を開く。京浜工業地帯の労働者に向け殺虫剤などを商う中、手



上/「黄色いクリーム」として親しまれてきた「ユースキン」。誕生当初から含まれる保湿成分のグリセリン、消炎成分のdl-カンフル、ビタミンB₂などに、現在はヒアルロン酸ナトリウムやビタミンC等を加え、さらなる品質向上を図っている(120g 1,639円) 下/仕入れの為、一日に川崎～日本橋間を自転車で二往復したという初代・良清(左)と綿谷博士

荒れに悩んだ婦人が薬局を訪れる。「もつとベタつかずに、よく効くクリームがあればよいのに」。肩を落とす婦人の言葉は良清を動かした。水と油を混ぜ合わせる「乳化」に精通した綿谷益次郎博士と共に研究開発に没頭し、ついに一九五七年、念願のクリームが誕生。「あなたの肌

の為に」と「ユースキン」と名付けた。白色が一般的だった当時、ビタミンB₂由来の黄色いクリームに当初販売薬局は難色を示したが、その効き目は口づてに評判に。「積年の悩みから解放されました」、そんな手紙が続々と全国から届く。良清は出社すると、いの一歩に利用者からの便りに目を通したという。

そんな父の習慣まで引き継いだのが、二代目の和義さんだ。一九八八年に社長に就任すると、他社製品の取り扱いをやめ、ユースキン一本に注力。数々のシリーズを生み出してきた。「ハンドケアを通じて、肌と心、そして地域にうるおいを届けたい」。その想いから、同社で



川崎生まれ、川崎育ち。父の想いを引き継ぐ2代目・和義さん

は十一月十日のハンドクリュームの日には、全国各地で街角ハンドマッサージを実施。また、地元・川崎に貢献したいと、小学校への出張授業などにも積極的に取り組んでいる。「子どもの頃の川崎は、労働者で溢れかえり、私も屑鉄拾いで小遣い稼ぎをしたものです。今は工場の排煙も綺麗になり、家族連れで楽しめる施設も増えました。この先も創業以来築いてきた、お客様や川崎の街との絆を大切に守っていきます」と力を込める。



左/全国各地都市で実施した街角ハンドマッサージの様子。サンプルの提供と共に、自身でできるハンドマッサージのポイントをレクチャー 右/出張授業にて。「子どもの頃から、ハンドケアの大切さを知ってほしい」と和義さん

川崎で創業し七〇余年、人々の肌にもうるおいを届けてきた「ユースキン製薬」。発売から六六年、今では国外にも多くのファンを持つ「ユースキン」誕生の物語と、地元・川崎への思いを伺った。

「江戸時代から未来へ」 川崎市長メッセージ

川崎市長の福田紀彦さんが、地域振興に期待するメッセージを寄せた。「二〇二三年は東海道川崎宿ができて四〇〇年の記念として、市民の皆さまと一体となって様々な取組を進めているところです。この機会に川崎宿の歴史と文化について大いに知っていただき、さらには数々の魅力を直接感じていただきたく、ぜひ川崎市への来訪をお待ちしております。二〇二四年は川崎市制一〇〇周年の年となります。江戸時代から未来へ、市民の皆さまの力で新たな魅力を育んでいる川崎市にご期待ください。」



福田紀彦川崎市長

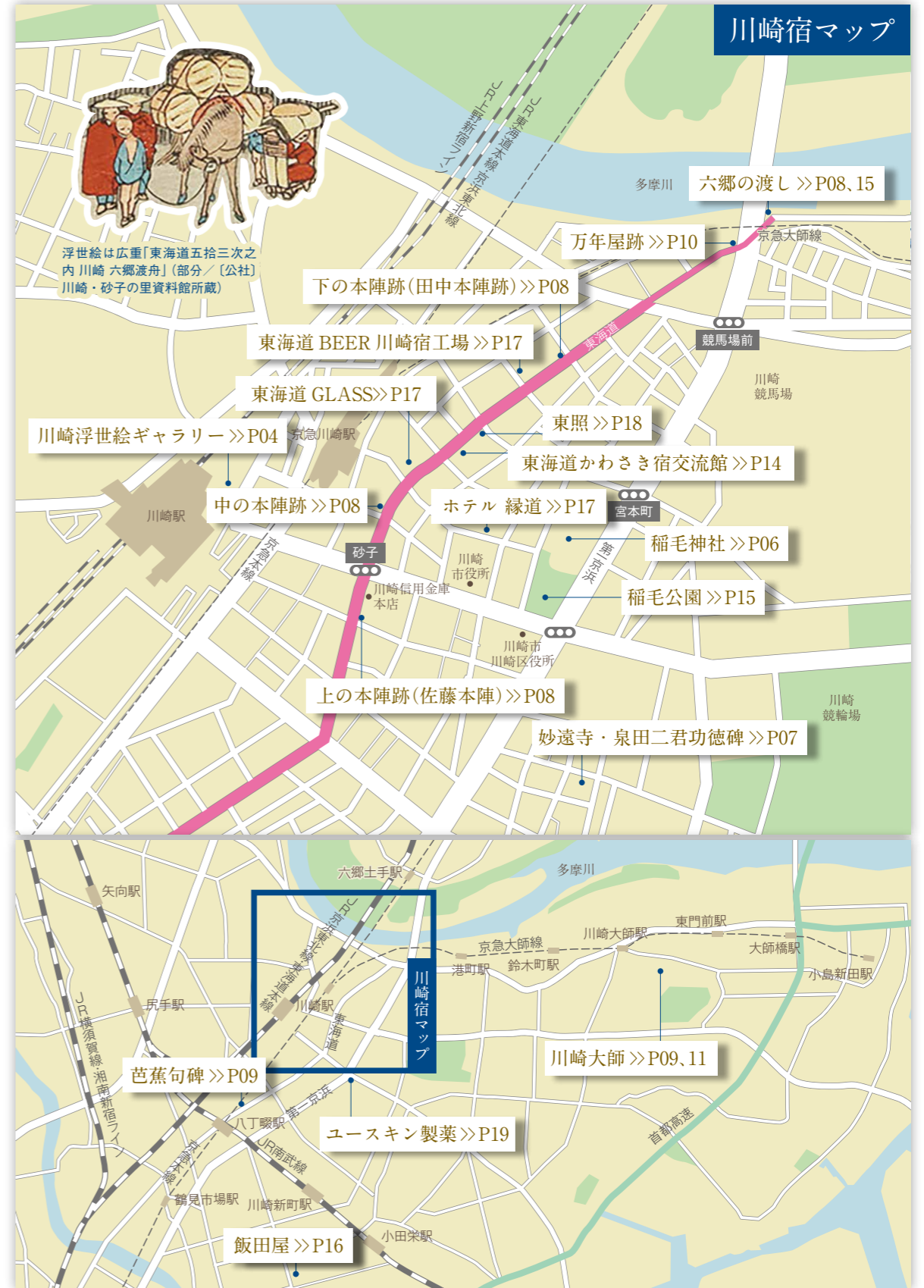
シンポジウムは一九八八年に土山宿(滋賀県甲賀市)で第一回が開催され、以降、東海道の各宿場が持ち回りで開催してきた。川崎宿での開催で三五回目となり、「NPO法人歴史の道 東海道宿駅会議」と川崎市が主催。「東海道川崎宿2023」「川崎宿起立400年プロジェクト推進会議」が共催する。歴史タレント・堀口菜純氏による基調講演や、パネルディスカッション、三角おむすびに関する企画などが予定されており、地元・川崎や全国の参加者と交流が図られる。シンポジウムの翌日、二二日(日)には「六郷の渡しまつり」、その翌週の二九日(日)には「かわさき大師ウォークラリー」を開催。秋には東海道沿いの街路灯に「東海道川崎宿」「東海道」と記した行灯風の照明(中間灯)も設置される予定で、街道の風情を演出する。

川崎宿起立400年プロジェクト推進会議

全127団体（※50音順、敬称略、2023年7月31日時点）

- 愛知ふとん店
- 株式会社アイ・レジャー・エンターテインメントカワスイ川崎水族館
- 葵薬品産業株式会社
- 株式会社 アクサス川崎
- 旭町一丁目町内会
- 旭港町内会
- 株式会社 アップ総合企画
- アルマーク株式会社
- 砂子1丁目町内会
- 砂子2丁目町内会
- 宗教法人 一行寺
- イツ・コミュニケーションズ株式会社
- 稲毛神社
- 株式会社 岩田屋
- 鰻・割烹 まるだい
- 有限会社エスケータクニカルシステム
- 小川町町内会
- 小川町通り会
- 公益社団法人 神奈川県宅地建物取引業協会川崎南支部
- 神奈川県中小企業家同友会 川崎支部
- 有限会社カネコ住販
- カプセル&サウナ 川崎ビッグ
- 有限会社花紋
- 川崎砂子会協同組合
- 川崎駅前広域商店街連合会
- 川崎駅前仲見世通商店街振興組合
- 一般財団法人 川崎沖縄県人会
- 株式会社川崎京香園
- 川崎キングスカイフロント東急REIホテル
- 川崎銀座商業協同組合
- 川崎銀座柳街商業協同組合
- 川崎区中央地区連合町内会
- 川崎区文化協会
- 川崎幸ロータリークラブ
- 川崎市栄養士会
- 一般社団法人川崎市弘済会
- 川崎小売酒販組合
- 川崎市産業振興財団
- 川崎市中央観光協会
- 川崎市東田商店街商業協同組合
- 公益財団法人川崎市文化財団
- 一般財団法人川崎市保育会
- 公益財団法人かわさき市民活動センター
- 川崎宿インバウンド研究会
- 川崎小学校同窓会
- 川崎商工会議所
- 川崎市立宮前小学校教育後援会
- 川崎新宿青年会
- 川崎信用金庫
- 一般社団法人川崎青年会議所
- 川崎セントラルホテル
- 川崎総合法律事務所
- 川崎大師表参道商業協同組合
- 川崎大師観光協会
- 川崎大師仲見世通会
- 川崎大師平間寺
- 川崎田島ライオンズクラブ
- 川崎地区ホテル連絡会
- 川崎中央プランナー
- 川崎中央ロータリークラブ
- 川崎日航ホテル
- 川崎東ライオンズクラブ
- 株式会社 川崎フロンターレ

- 川崎平和通商店街振興組合
- 川崎マリンロータリークラブ
- 川崎ライオンズクラブ
- 特定非営利活動法人 かわさき歴史ガイド協会
- 川崎ロータリークラブ
- 株式会社 久保田酒店
- クラブツーリズム株式会社
- 有限会社グリーンフーズあつみ
- 京浜化工株式会社
- 京浜急行電鉄株式会社
- 株式会社Kラインサービス
- 三陽フォトスタジオ
- JTB川崎支店
- NPO法人姿勢教育の孝心会
- 下並木町会
- 有限会社進栄商事
- 合資会社清花堂
- 公益社団法人全日本不動産協会神奈川県本部川崎支部
- 第一生命保険株式会社川崎支社
- 大幸機器株式会社
- 株式会社タウンニュース社川崎支社
- たちばな通商店街振興組合
- チネチッタ通り商店街振興組合
- TMCシステム株式会社
- 東海道GLASS
- 東海道BEER川崎宿工場
- 東海道川崎宿2023
- 東海道かわさき宿交流館
- 東海道セブンスターズ
- 東京電力パワーグリッド株式会社 川崎支社
- 株式会社東照
- 東都熱工業株式会社
- 堂本製菓株式会社
- 有限会社成喜
- 目進商栄会
- 日進町町内会
- 一般社団法人 日本社会人アメリカンフットボール協会
- 林家人形店
- パレール商店会
- 東田町内会
- 東日本旅客鉄道株式会社 川崎駅
- 株式会社藤栗毛
- 株式会社平川
- 特定非営利活動法人ファンズアスリートクラブファンズスポーツクラブ川崎
- 有限会社 福来屋商店
- ホテル縁道
- ホテルメトロポリタン川崎
- 正宗産業株式会社
- 本町一丁目町内会
- 本町二丁目町内会
- 本町2丁目東町内会
- 三井住友信託銀行株式会社川崎支店
- 美之浦建設株式会社
- 美濃戸
- 宮前町町内会
- 宮本町町内会
- 有限会社 武藤時計店
- 明治安田生命保険相互会社 川崎支社
- 株式会社 山根工務店
- ユースキン製菓株式会社
- 横浜銀行川崎支店
- 有限会社 龍美社
- WILD STOCK
- 若宮八幡宮



発行 川崎宿起立400年プロジェクト推進会議（事務局：川崎区役所まちづくり推進部地域振興課）
 編集 月刊『江戸楽』編集部
 発行年月 2023年8月



400年 川崎宿 東海道



東海道川崎宿は
2023年に
起立400年を迎えます。

400年記念サイトは
こちら

